動へ傾斜する傾向をもっていたのに対して、純正アナキズムの一部（あえて一部という）は革命者であるアナキスト主体の問題を問い、そこからアナキスト独自の革命運動を構想したのである。

一九三五年十一月から翌年にかけて、無政府共産党の検挙にはじまり、農青検挙、自連解散と追いうちをかけられるようにアナキズム運動はここに終熄した。

戦後、アナキスト組織は再建されるが、大衆運動をになう力量をふたたび持たない。その一方で戦前の対立をひきずるように陣営の内部に分裂と混迷が存在する。本書の終章から二、三引用して、この一文を締めくくることとしよう。

〈アナキストは人間＝個の尊厳、自主自治の精神、あるいは自由連合主義を高唱した。個の自立・人間性の回復という命題にたいし、彼らほど情熱を燃やしたものはほかにいなかったといっても過言ではない。（略）しかしその反面で理論的にはたえず不十分さと未完成な側面、経済分析や経済理論の不備、また人間＝個の尊重や自立といいながら、その意味すること、あるいはそれが現実の運動においてどのように生かされるかということなど、多くの点でも不鮮明な部分が少なくなかった〉（P二四六）

〈資本主義の高度化がすすむなかで、アナキズムが体制内において権力や権威の骨抜きをはかる個人主義的な個の自立の思想としての道をえらぶのか、それともそれをこえて強力な反体制理論としての道をえらぶのか、あるいはその双方を結びつけた反逆と反体制の理論としてすすむのか、といった戦後アナキズムの中心的な流れを構成したいくつかの視点も未解決の問題としてのこされたままである〉（P二五〇）

〈その思想・運動に有利な状況が訪れているといわれながら、その再昂揚がみられないということは、外的条件をうんぬんするより、その内在的脆弱性こそ問われなければならないと考えるべきだろう〉（P二五一）

私たちはこの提言を素直にうけとるべきであろう。私たちは問われているのである。

（青木書店刊・三五〇円）



# 〈大逆事件〉東上記

## ——一月二四日と二五日——

向井　孝

### 1

一月廿一日に上京した。用件のひとつは〈大逆事件の真実をあきらかにする会〉が例年の行事としている〈一月廿四日の集り〉に出ることだった。

いうまでもなく、それは第一に、明治四四年一月廿四日に幸徳ら十一名の人たちが、翌廿五日管野スガが、絞首台にのぼっていったことで、決して忘れられない日である。

第二に、明治四五年以降、いわゆる冬の時代のきびしい弾圧をくぐって、堺利彦ら少数の仲間が、毎年その日ひそかに集ってきて墓参し、遺志をつぐことを誓いあった—その無量のおもいをこめた行事の〈志〉と伝統を継承するものとしてである。

ところが、通知が一向にこなかった。

上京して森長氏に電話したら、「ことしは集りを中止し、その対策の世話人会をやるだけ」というのであった。

管野スガの碑がある淀橋の正春寺でひらかれた世話人会は、森長英三郎、糸屋寿雄、神崎清、塩田庄兵衛、大原慧、大野みち代、遠藤斌の諸氏七名とおわりちかく平岡誠氏が顔をみせた。

〈あきらかにする会〉の世話人が、弁護士や学者や文章かきといった—それにもまして現実のアナキズム運動と会がほとんど無縁に見えることが、ある種のアナキストにとって気に入らないらしいことは、およそ想像できる。

だが、この会の発足当初から、またはその企てに対して、一・二をのぞいてアナキストたちは、何の協力もしなかった、といってよいだろう。もっともアナキスト自体が非力だったし、それぞれ事情もあったことだろう。それは情ないことだが仕方がないことである。

会の活動は、だからむしろアナキスト以外の人々の協力と貢献によって、有志による大衆運動として、果されてきた。いまもなおそうであり、それはかわっていない。

とするならば、非力あるいは他の事情でかかわりえなかったアナキスト自身をかえりみるとき、アナキストは

責任を感じこそすれ、一月廿四日行事の粉砕を叫ぶようなことがありえてよいものだろうか。

ところが、「数年末、アナキストグループが粉砕を叫んで、いやがらせや進行の妨害をして、暴力沙汰にも及びかねない。そして事情をしらぬ遠来の人や、年一度の出合いにと上京した遺族に事が及んでは、とことしの集りを中止した」ということなのである。

世話人会出席者は、二氏をのぞいて、いずれも六十をこえ七十ちかい人たちである。そのような人たちが、あつまり、ニュースをつくり、封筒をかき、金をあつめたり、会をひらく支度をしたり、雑務をすすめてきたのである。

ぼくが坐ったところは、机を間にしてちょうど森長氏とまむかいにあった。

この十余年間、会の中心として、多大の労力と大きな経済的負担を自ら背負われた森長氏が、とつとつとして、眼をしばたたきながら「…粉砕を叫んできたアナキストたちは、ことしは見事意図を達成した、と云うでしょうね…」と語られたとき、ぼくはただ恥ずかしく、身がちぢむおもいであった。このときほど、自分もそうよばれているアナキストを、自分をもふくめて憎悪したことはない。森長氏の誠実な献身と犠牲に考えを及ぼすとき、愧死するとも許されない、とおもった。

しかも、では粉砕したというアナキストはその代りに、ことしは何を提起し、一体何をなしえたのか！大逆事件を私物化するアナキストを許すな！

## 2

廿五日、約束の六時半が八時すぎになって、遠藤氏と一しょに近藤真柄さん宅にゆき、泊った。

そこへくるまえ、芳村君戸駒君らと一しょに、五反田でちょっと一パイやってわかれた。真柄さん宅でも、まちかねたとばかり酒がでた。すでにごちそうがおぜんにならんでいた。

最初から廿四日のことが話題であった。

いつだったか、真柄さんが「一月廿四日は、わたしにとっては、ほかの日とちがう。だからどんな用件が他にあっても放り出して、私はその集りへいく。それは父の志であり、わたしがうけつがねばならないものだから…」と、しみじみ語られたことがある。

真柄さんが〈父〉とさりげなくよばれるとき、堺利彦が急に身近く、あのみおぼえの写真の顔となって、やぐらごたつのこの座のどこかに、だまって仲間入りしているようだった。



ぼくは、真柄さんのことばを、昨日、世話人会で語りながら、なぜかとつぜん、眼頭が熱くなり、まわりがぼやけてしまったのを思い出した。—

ことばが絶え、一しゅんしいんとしていた。

とどこからか遠く、一団の足音がきこえてくる気がした。それから、木枯ふく冬の日のなかに身をちぢめて、谷中や染井と墓地をたずねあるく、筒袖やトンビすがたの数人のむれが、くろく小さくかたまって見えてきた—それは、時には人数がふえ、時には消え入りそうになりながら、しだいに大きく近づいてくるのであった。

「いったい、おたくのほうは、どうなってるの…」

はっとすると、真柄さんがつと手をのばして、手酌で自分の盃をみたし、おもいをのみこむように空にされるのを、みた。ぼくは、そんな真柄さんを、いままでみたことがなかったのである。

「お酒を、だいぶ、めしあがるのですか」

おもわずききながら、そのへおたくのほう〉とは、廿四日の粉砕をそのままに許してしまったぼく自身であることで、眼がくらむ思いだった。

「それにしても、そんなことでよすなんて、すこしだらしないじゃない…」

それは、世話人会への注文というより、そのようなへおたくのほう〉へのおもいやりというべきであったろうか。

そしてへだらしない〉というそのことばは、堺利彦の娘として、また赤瀾会以来の闘士として、長くたゆみのないその足どりこそが、はじめて云いうるものなのであった。

「とうとう一升カラにしてしちゃった…」

遠藤さんの声をききながら、ぼくは倒れ伏すばかりに酔いがまわっているのを感じ、こんな気持ち泣き上戸かな、とおもったのである。

× × ×

へ大逆事件の真相をあきらかにする会〉がひらく、例年の一月廿四日の集りが、はじめはその意図がなかったにせよ、いまは、明治末年にはじまる堺らのひそやかな墓参行の伝統と遺志をひきつぐものとなっていることは間違いないであろう。

そして、大逆事件関係者・遺族のおもいをあつめ、それをうけとめるものとして、例年一月廿四日の集りをひらいてきた事実は、決しておろそかに考えてはならないことである。

それはまず第一に、何よりも、どのような意味でも一月廿四日の集りを守らねばならぬということに帰着する。

とすれば、アナキストと否とをとわず、アナキストなればなおさら、そのことをさまたげるものにたいしては、たとえ事が卑少で馬鹿げた対応のようにみえても、大げさに云えば体をはってでもたたかわねばならないものだとぼくは思う。

二どと粉砕をゆるしてはならないのだ。

追　記

実は、世話人会の席上はなされた〈大逆事件大阪組〉の武田、岡本、三浦の墓または碑をつくることに関連してかくつもりだった。ところが前文だけで予定の紙数をこえてしまったので、次号にそれをくりのべることにした。森長氏の調査では、武田、岡本の墓はそれとしてないが、三浦安太郎については、〈新社会〉大正五年七月一日百瀬晋投稿で「氏名不詳の同志三名が阿倍野墓地に三浦の埋骨を行って墓をたてた」とあるという。（小山仁示氏が報告）

ひろい阿倍野墓地から、それをさがし出すのは僥幸にちかいが、すこし体があいたら三月以降、祭日のひるまでも利用して、一区画ずつ区切って、しらべることをやりたいと思う。人数は多いほど能率があがるわけである。大阪周辺で協力して下さる方の当発行所までの申出を期待したい。

それをとくにかきそえて、おねがいをする。

73年2月2日早朝

連絡先　大阪市阿倍野区旭町2－12－2
泉原文化10

〈再　追　記〉

右の三浦の墓に関して、逸見吉三氏が調べられたところでは、該当のものはないとのことで、百瀬の投稿は、そのような記事を送ることでちょっとさわがせてやろうというような意図でなかったかとおもわれる。

（2月10日）



# 想い出すまま

高島　洋

## はじめに

正月の三日神戸グループが集って、第三次イオム創刊号の打合せを行った。その際、戦後関西におけるアナキズム運動の推移については、将来において向井、山口両氏が書いてくれるとおもうけれども一応それへの一つの資料として、自身の戦後アナキズム運動とのかかわりや見聞を中心として、私にかくようにと注文があった。わたしは日常、日記とか記録的なものを全然かいておらず、かくとすれば自分の記憶を想起しての記述にとどまることを条件として、当日のアルコールの勢いも手伝ってうっかり引受けてしまった。従って一つのことの年月も定かでないし、前後を逆転して記述することもあろうとおもうけれども、それは後日指摘してもらって整理しなおすこととして気ままにかいてみたいとおもう。

## 姫路での奇妙な会合

私の詩集のなかにも記されているように、私が向井孝とはじめて会い交渉をもつようになったのは、神戸の詩人小林武雄氏の紹介による。イオム例会の通知をうけておずおずと向井宅を訪問したのが昭和二十三年の九月ごろではなかったかとおもう。玄関からつき当りが書斎になっていて、そこでは山口英と柳井秀が激論を交していた。私は話の内容もよくわからないので黙って聞いていたが、向井氏から「まあ作品をかいてみなさいよ」と言われ、のちにイオミズムと言われる即物的な形象の方法を教わって「まあやってみます」ということでその後時々姫路を訪問するようになった。

その後向井氏は姫路で若い人々を集めて詩の教室的なことをやっていたが、その詩の会の名称も今は忘れてしまった。ある日その詩の会の案内状をもらって、当日の会場である旧姫路駅から本通りを北へ歩いて四分位、グリル三松の二階へ行ってみると、二階の一つの部屋で二つの会合が行われていたのである。片方では壁に黒旗をはりつけて、一つのデスクをはさんでアナキストらしい人達が参加していた。その顔ぶれは私にとって未知であったが、のちに判ったところでは議長をやっていたのが

佐竹氏ですごく活気のあったことだけをおぼえている。私達はその部屋の反対側の方で一つのデスクをとりまいて小さくなって詩の話をしていた。その会合は向井氏にしてみれば若い人々にアナキズムを印象づける意図があったのか、それとも会場がなくて遇然二つの会合が一ヶ所でやる破目になったのか、向井氏自身ひとりで両方に参加することができないのでいつそのこと同じ部屋でやってしまえということになったのか、そこのところは聞いてみなければわからない。しかしそれからしばらくして向井氏から日本アナキスト連盟に入らないかとの勧誘を手紙でうけた。私はアナ連に入ることに少しも抵抗を感じなかったけれども、そのころすでに知已になっていた本多宏盛さんからクロポトキンの「パンと略取」を借りて読んだ程度の私だったのでまさにあやしげな連盟員ではないかと自分自身に疑問をもちながらも承諾の返事を向井氏に送ったのである。

### 京都知恩院での全国大会

昭和二十四年の五月ごろではなかったかとおもう。日本アナ連の全国大会の案内状をうけとって私は本多さんと省線で京都まで行き、会場である知恩院本堂の裏の木々にかこまれた静かな部屋に上って行った。全国からそうそうたる連盟員が四〇名位も参加していたであろうか。議長団には水沼、綿引、萩原氏など日本労働運動の草分けである各氏が選出されていた。連盟事務局担当者は若い山口健二氏である。石川三四郎老や岩佐作太郎老など知名人も出席されていて場内は活気にあふれていた。岩佐老は討議に参加するというより、敷布団を配ったりして何かと出席者の世話をする方にまわっておられたのが印象的であった。昼の休憩の時に、本多さんと私は向井氏を通じて久保譲氏に紹介された。当時久保氏は広島の栗原氏宅に居て平民新聞の発行をつづけられていたのである。討論のなかで最も熱のこもった発言をしていたのが九州の井原氏と東京の笹森氏の二人であった。井原さんにしても久保さんにしても当時は若く元気にあふれていた。討論の推移は専ら平民新聞をどうするかに集中されていて、久保さんが広島で発行していた平民新聞に不満の意見もあっていろいろ意見が出されていたが、当の久保さんは至って平然としていて弁解がましいことは一言もいわず専らみなの意見を聞いていたのがアナキストらしく私には見えた。結局、若い人に編集を担当してもらおうということになり、当時若手であった向井、山口の両氏に編集者が決定したのである。新聞の名称も平民という語はすでに時代（戦後）にふさわしくないとして



自由共産新聞に変更されたのである。しかしこの新聞も数号で終りを告げ、その後は九州の副島氏がガリ刷り四頁の「クロハタ」を出すこととなる。それはさておいて当日は解散後、夕方から京都駅からそう遠くない小学校でアナキズム講演会が催された。聴衆は少く連盟員を除けば三〇名位のものであった。広島の栗原氏が流暢な演説を行なった。アナ連が少数派だったからか別段、官憲の介入はなかった。

### 逸見氏の労働問題事務所での大会

日本アナ連として何回目の大会になるのか私にはいまわからないが、とに角昭和二十五年でなかったかとおもう。大阪市の日本橋一丁目市電の電停から、さほど遠くない元小学校の建物の中に、逸見さんの労働問題相談事務所（正確な名称ではない）があって、そこで全国大会が行われた。出席者は正確には記憶していないが、東京から近藤憲二氏、山口健二氏、名古屋から小川氏が出席できないということで、永田氏ら三名の労働者、九州から副島辰巳氏、岡山から高畑信一氏が参加していたようにもおもう。関西地協からは、山鹿、久保、逸見、福井、向井、山口英、河本、小松、本多、笠原、高島が出席していたと記憶している。討議の内容など殆んど忘れてしまったが、たしか副島氏が九州からガリ版刷り四頁の「クロハタ」を出しかけていたころではなかったかとおもう。逸見氏のその事務所は、そう広くなかったけれども殆んどタタミ敷で、本棚にアナキズム関係の書籍が備えつけてあった。逸見氏は、若い人々が訪ねてくるので本を借してやるのだが、なかには返済しないまま音信不通になってしまうと嘆いていたのを記憶している。

（つづく）

次号原稿〆切　四月末日

コスモス社刊　頒価一〇〇円

高島洋詩集

申込先　神戸市灘区灘北通四—三九　高島洋

## 海外ニュース

最近の海外通信の月平均は、定期刊行物13、不定期刊行物10、手紙10、書籍類2となる。発信地は、仏、独、伊、ベルギー、オランダ、スイス、ハンガリ、カナダ、合衆国、オーストラリアである。かってはかなりの数であった中南米からの連絡はちょっと途絶えている。新聞、雑誌は論文が主で、ニュース的記事は仲々見当らない。

○フランスのヴィシーに無神論者の集団があり、月刊「無神者論壇」を出し、毎年大会を開いている。我々には理解しにくいが、キリスト教世界では、神と教会の否定は反体制運動の中で重要な部分を占めている。いま今年の大会の準備をすすめている。

○オーストラリアのアナキスト運動は、ブリスベィンに「自己管理グループ」（アナキストに近い？グループ）、メルボルンに労働者協会（WPA、種々のアナキストの集まり）、シドニーに「赤と黒」誌を発刊する知的小グループといったところが主なところらしい。

○二月十八日　ベルギーテレビ放送の「現代社会におけるアナーキについて」の録画採りに、フィンスター（アナキスト新聞）とボーラトン（アナルシー誌）がゲスト出演する。

## 後記

昨年（七二年）十一月末、高島洋詩集出版を口実にして、久々に大阪・神戸の旧アナ連の仲間十余名が顔を合わせた。その席の終り頃、酒も好い加減に廻った頃、「何か出そうか」ということになった。これがイオムの種まきであった。その後は、禄に相談もせず、強引に原稿を集め、イオムを出すことばかり考えた。イオム発行の準備的な話し合いはまったくなされていない。従ってどんなものが出来るか、出て見ないと分らない。それにもかかわらず、それが出来たのは疑いもなく同志的信頼がその基礎にあったからである。それに甘えたり、慣れすぎたりしてはならないと自戒している。

イオムは同人誌である。同人の自由な寄稿による総合誌、つまり原稿のジャンルを限定しないで、自由に書こうということである。同人の殆どがアナキストであるという事実から、アナキストの出版物であることは明らかであるが、機関紙的性質のものではない。イオムを出すについて特別な意図はない。また、いつもアナキズムに関するものをテーマにしなければならないとは考えない。イオムは、さしずめアナキストの自由な同人誌といったところである。